



巻頭特集

岐阜提灯の伝統工芸士

野原 明美さん

300年歴史に 新たな息吹を

国の伝統的工芸品である岐阜提灯。

特徴である繊細で優美な絵柄の火袋は、この地方の良質な竹と、
薄さと丈夫さ、そして美しさを兼ね備えた美濃和紙を原料に生み出されています。

『Wao! Club』エリアに住む野原明美さんは、

そんな火袋の絵付職人として、女性で唯一の伝統工芸士。

江戸時代から継承されてきた伝統を守りつつ、時代に寄り添つて多様な嗜好にも対応。
インテリアとして暮らしに調和する提灯や行灯づくりに挑戦しています。

和紙使いの明かりに魅了され
飛び込んだ岐阜提灯の世界

日本では盆が来ると、提灯や行灯に明かりを灯して先祖や故人の靈を迎えます。300年以上の歴史を誇る国指定の伝統的工芸品「岐阜提灯」は、盆提灯や納涼用に広く利用されてきました。

上質な和紙と竹の生産地である濃地方の工芸品として発祥したとされ、江戸時代には幕府へ献上された。高級品でした。東海北陸地方の幸の際、明治天皇の目にとまつたとき、岐阜提灯の名は全国に知れ渡ります。

製作工程や技法は今も昔も同じで、熟練を要します。一人ですべて行うのではなく、火袋をつくる張職人、和紙や絹に版画のように彩色をする摺込職人、無地の火袋に直接、絵を描く絵付職人らで分業しています。野原明美さんは28年の経歴を持つ絵付職人で、2014年に岐阜提灯火袋部門の伝統工芸士に認定されました。

「子どもの頃から絵を描くのが大好きだった」と笑顔で語る野原さん。彫刻家でありインテリアデザイナーとしても有名なイサム・ノグチ氏に憧れて、高校卒業後は名古屋造形芸術短期大学（現名古屋造形大学）プロダクトデザインコースへ進学します。特に和紙を使った照明デザインに惹かれ、イサム・ノグチ氏の作品を取り扱い、岐阜提灯の製造販売を行なう岐阜市の尾関次七商店（現・株式会社オゼキ）の門を叩きました。

企画展で開花した 独自性のある作風



吊り下げる卵型の御所提灯（写真右）が岐阜提灯の代表格。据え置き型の大内行灯（写真左）もよく知られています

入社後は、絵付職人として修業の日々が続きます。絵付の工程は日本画とほとんど変わりませんが、火袋は平面でなく曲面。さらに、竹ヒゴの凹凸もあるという難しさがあります。また、絵柄の配置、色合い、大きさをすべて同じにしなければなりません。

「なおかつ素早く仕上げるのが職人技です」と野原さん。

「盆提灯の多くは、初盆用に秋の七草を描きます。私は家紋を描くのが好きですね。家紋は家ごとに違うので興味深い。毎年それが楽しみで、この仕事を続けられたらいいですね」と話します。

入社から5年後には、自宅に工房を構えて独立。それまで担当してきた仕事を継続しつつ、梓にと



「若い世代に岐阜提灯の魅力を伝えたい」

現在は1ヵ月に30張を限度として受注しています。「おまかせ、と言われば、相当なプレッシャー」と笑顔を見せます。

らわれない絵柄にも挑み始めます。挑戦のきっかけは、毎年東京で開催されていた「女性職人展」でした。

秋の七草を描いた作品を初出品したもの、反響がほとんどなかつたのだろう。しかし翌年、ひときわ目を引く橙色のノウゼンカズラを描いてみたところ、「くなつた妻に似合うから売つてほしい」とあつという間に買い手がつきました。

「この冒険によって、購入していく方の個性や嗜好が多様化しているのを実感したんです。『大好き』

仕事も育児も常に全力 伝統技でもっと冒險したい

現在、野原さんは大学1年の長男を筆頭に三男一女の母。育児に専念

するため、30代の前半に2年間休業していました時期もあります。「毎年6月から7月にかけて、盆提灯の製作で多忙になります。子どもたちが小さくなると、またまた忙しくなります。子どもたちが小さくなる頃は、みんな寝静まつた夜中に集中して作業していました。寝不足で体も精神的にもきつく、男性の職人をうらやましく思つたときも。でも『仕事だから』と子どもたちに我慢させ、迷惑をかけたくなかつた。いまも同じ気持ちで仕事を続けています」と信条を語ります。

近年、家に仏壇のない家庭が増加するのに合わせ、利用機会は減少つつある岐阜提灯。インテリアとしての販路を広げる一方、他の工芸品と同様、後継者不足という問題も抱えています。「伝統ある文化を次世代につなぐには、新しい製品づくり

に挑戦していくしかないと考えています」と今後を見据えます。

いま試してみたいのは、エミール・ガレのランプのようなアール・ヌーヴォースタイルを感じさせる絵柄の表現。これまでに培った絵付の技術を携えて、再び冒険に挑もうとしています。「新たな活動や作品が注目されることで、若い世代に岐阜提灯の魅力を伝え、需要の増加につなげられたらうれしいですね」

野原さんの夢が、どんな明かりを灯すか。これまでに見たことのない美しい花々が浮かび上がる瞬間を期待して、胸が躍ります。



①②筆は日本画用の筆を使い、絵の具は絵料を少量の二カワと水で練ります。絵の具の濃淡の加減が光の透過の強弱を生み、提灯や行灯全体の美しさを左右します。③描かれているのは秋の七草のひとつ、桔梗の花。万葉集に登場するほど、古くから日本人に愛されてきた紫の花からは気品が漂ってきます



profile
野原 明美（のはら はるみ）

大垣市出身。20歳で岐阜提灯の絵付の修業を始め、2014年に岐阜提灯火袋部門・絵付において女性初の伝統工芸士に認定。雅号は春香（しゅんこう）。養老鉄道池野駅にある「まちづくり工房霞渓舎」で地元の小学生に月2回、絵を指導しています

